卒業論文要約

私たちは日常生活において、属している社会の規範などに従うように行動を制御している。このような行動を「自己制御」という。自己制御が求められる場面において，その場に誰もいない時と，誰かいる時とでは本来とるはずの自己制御行動とは違ったものになることがあるだろう。このように他者状況によって自己制御行動が変容する要因や，変容の性差を検討することが本研究の目的である。

本研究では社会的場面における自己制御課題を6つ考えた。その課題について，それぞれ「誰にも見られておらず，気付かれる心配のない時」の自己制御行動と，「友人が規則を守っていない時」，「友人が規則を守っている時」，「周りの人がみている時」の3つの他者状況における自己制御行動との違いを検討した。また同調行動，自己決定意識，公的自己意識，私的自己意識との関連についても検討した。その結果，3つの他者状況全てにおいて自己制御行動の変化が見られた。

「友達がしている・していない」他者状況では主に仲間への同調が状況によって自己制御するか否かの個人差を説明する有意な変数として示された。「人に見られている」他者状況では公的自己意識が状況によって自己制御するか否かの個人差を説明する有意な変数として示された。また6つの課題のうち4つにおいて，自己制御の変化を説明する有意な変数として見出され、他の状況に比べ最も多かった。そのため他者状況において自己制御するか否かについては公的自己意識が最も関係していると考えられる。

これらの結果から他者状況において本来の自己制御行動とは違った行動をとることはあり得ることであった。よってたとえ1人の時に自己制御ができる者であっても，「友達が自己制御しているか否か」や「人が見ている」という他者状況や個人のパーソナリティ変数などによって自己制御行動をとることが出来なくなってしまうこともあるだろう。逆に本来は自己制御行動のできない者が，他者状況により自己制御行動ができるようになるということも本研究の結果から言えるだろう。